

委員会だより

<11月4日(日) 10名出席>

【1】財務報告：01年10月度決算報告 ()内:01年度年間予算

	01°収入累計	01°支出累計	収支差額
一般会計	5,247,531 (6,073,380)	4,471,035 (5,297,000)	776,496 (776,380)
建設会計	1,650,070 (1,876,674)	488,550 (1,817,000)	1,161,520 (59,674)
愛の献金	632,538 (617,864)	286,249 (320,000)	346,289 (297,864)
信徒会計	973,786 (744,520)	215,830 (510,000)	757,956 (234,520)

▶特記事項:

- ◆一般会計: ミサ謝礼15,000支出
- ◆建設会計: 会議机4個27,300支出
- ◆愛の献金: 国際協力の日(前の世界難民移住移動者の日のこと)41,000支出
- ◆信徒会計: まだバザー収益の入金があったことのみ確定の段階。バザー券231,000、聖母の園50,000、婦人会248,092(11/4現在壮年会63,470)二次分は10月度会計へ

【2】議事内容:

- ① バザー収益の1部寄付先の選定:
 - ◆婦人同志会は昨年度は特別だった。高齢の神父様の為のお金が足りない。一応、婦人同志会(20,000)、社会福祉協議会(30,000)計50,000を取り合えず決めておく。
- ② バザー反省
 - ◆壮年会、婦人会各例会で反省事項を出して纏める。
 - ◆委員会としての反省: 満遍なくかき回したつもりだが抽選番号がつかっている例も。偏りがあつた(?)かも
 - ◆63本の賞品が25名にあつている。(但しこれは多くの品物を買っているせいかも)
 - ◆マイクの音声がよく聞こえない
 - ◆バザー券代として事後に3,000持ってこられた方がいる
 - ◆婦人会のバザー支出で緑茶、ほうじ茶⇒会議費へ
 - ◆ネオパラエース⇒本来は婦人会会計にすべき
 - ◆ポリ袋⇒一般会計へ
 - ◆テント後始末は11月2日に有志の方々のご尽力で完了。
- ③ 死者のためのミサ(11月2日)
 - ◆参列者非常に少数。本年度より、婦人会ではなく教会としての行事となり、婦人は連絡網でまわさなかった。
 - 注: このミサは、中和田教会の物故者のためのミサ(従来は婦人会物故者のためのミサ)
- ④ 赦しの秘跡
 - ◆11月25日 森田神父様
 - ◆12月24日 クリスマスミサ前(5時頃)上杉神父様に依頼
- ⑤ 11月七五三のお祝い
 - ◆該当者は来週揭示
 - ◆お祝い飴とおめだい: 花坂さん準備
- ⑥ 湘南短期キリスト教セミナー
 - ◆11月18日に最終打合せが行われる予定
 - ◆昨年は受付3名が協力したが、本年は受付に加えて12月8日分の保育立看板などの拠力要請あり。
 - ◆看板は壮年会で2名出す(1名は石井さん)。
 - ◆受付は1~2名、保育は1名で協力していく。

- ◆本日現在、中和田のセミナー申し込みは7名。
- ⑦ 区民クリスマス
 - ◆連合聖歌隊は、当初30名予定していたが実際は、一般区民の参加18名も加わって53名になりそう(中和田は7名)。
 - ◆朝日新聞の地区版情報誌(アップルフレンズ)から取材を受けた。11月25日号に掲載される。
 - ◆広告募集: 中和田が10社集め、全18社、18万円で幸先良い
 - ◆12月11日に各団体が集まって各担当内容の打合せを行う。
 - ◆寄付を募る件は泉区役所の了承を得た。(横浜善意銀行に寄付して欲しい由)
 - ◆整理券 600席 700~800名分配る
 - ◆幼稚園3 参加者30名の親族だけでも150名になる?!
 - ◆人数の心配出て来て嬉しい悲鳴一次回実行委員会で検討



壮年会だより

<11月18日(日) 9名出席>

- ① 委員会報告(11月度) 別項参照。
- ② 12月の聖書朗読 12/2竹内さん 12/23東原さん
- ③ バザー反省
 - ◆放送がよく聞こえなかった。
 - ◆雨のためくつろげる場所が少なかった。
 - ◆チラシに地図を入れると良い。
 - ◆テント片づけ土曜日まで延ばさず、様子を見て実施する。
- ④ 壮年会バザー会計報告

収入	116,480円
支出	52,993円
収益	63,487円
- ⑤ 閉会の折りの後、先唱者研修を御聖堂で実施(8名参加)先唱者マニュアルを、備えておく。

婦人会だより

<11月18日(日) 34名出席>

- ① 委員会報告(岩崎)「委員会だより」参照。
 - ② 第5地区福音宣教委員会から(内藤)
 - ③ 区民クリスマスについて(阿部)
 - ④ 婦人同志会から(阿部)
 - ① 黙想会のご案内 11月29日(木)カトリックセンター
 - ② 歌舞伎鑑賞会 多数のお申し込み有難うございました。
 - ⑤ バザー関連: 生憎雨天のバザーでしたが、力を出し合い、心を合わせて無事終了しました。お疲れさまでした!
 - ◆会計報告: 当日純利益 256,312円
 - 当日残品売上 55,985円
 - 合計 312,297円
 - ⑥ 反省会: 反省事項や気づいたこと、要望など沢山の有意義な意見が出されました。次回のバザーに生かしていきたいものです。
 - ⑦ 次年度役員(予定)のご紹介
 - A地区 森田さん、巢田さん
 - B地区 阿部(寿)さん、太田さん
 - C地区 上野さん、青柳さん
 - D地区 古田さん、内藤さん(福音宣教委員)
 - ⑧ お知らせ: 甲斐ミヨ子さんが退院され、例会にもお出でくださいました。これからはお大事にしてください。
- 次回例会は12月29日(日)、次回当番はD地区です。



ミサ当番表 (2001年12月, 2002年1月)

月/日	主日	朗読、奉納	オルガン	月/日	主日	朗読、奉納	オルガン
12/2	待降節第一主日	壮年会	保科	12/30	聖家族	婦人会D地区	森田
12/9	待降節第二主日	青年会	岩淵	1/6	主の公現	壮年会	保科
12/16	待降節第三主日	婦人会D地区	森田	1/13	主の洗礼	青年会	岩淵
12/23	待降節第四主日	壮年会	保科	1/20	年間第二主日	婦人会A地区	森田
12/24	主の降誕(夜)	壮年会	岩淵	1/27	年間第三主日	壮年会	保科

当番の方は10分前には集合して下さい。ご都合の悪い方は典礼委員(萩原氏: Tel. 802-6258)迄お申し出下さい。

広報 **なかわだ**
第275号

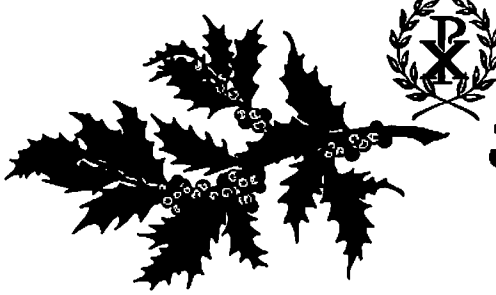
12月の予定

主の降誕深夜ミサ	12月 24日 7時
委員会	12月 2日
壮年会、婦人会	12月 16日
サロン	12月 9, 23日
レジオ	12月 14, 21日

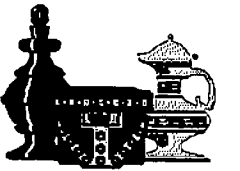
Merry Christmas

2001年12月号

中和田カトリック教会
広報委員会発行
泉区中田北1丁目9-1
Tel. (045) 803-6141
平成13年12月9日



この頃のこと ②



山崎 正俊

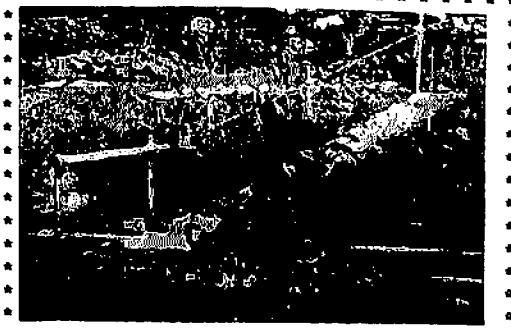
中和田教会の東側に畑が作られました。フェンスの外側です。その向こうは、約2メートルほどの高さの盛り土になっていて、市営道路の予定地だということですが、その工事は当分の間は中止だそうです。畑とその土地の間は溝川になっており、コンクリートで固められ、ベニア板が渡してあります。そして、足が不自由になった私のために、何本かの杭が打たれ、物干しざおがテスリとしてとりつけられ、なんとか渡れるようにしていただけました。フェンスに出入り口を付け、畑にも溝川のあちらにも行きやすくなり、盛り土の上にも楽に行けるようになりました。傾斜面も登り降りできるので、雑草を刈り取り、コスモスや菊を植えて、見るものを楽しませ、平らなところは広場のように入手を入れて、この間などは、広場の五分の一ほどは、八畳ほどの敷物を広げて坐ったり寝ころがったり、昼食をいただいたりお茶を飲んだりして、休んだり雑談を楽しんだりの場所に使えるようになりました。また、幼児たちの遊び場にもされているようです。

私も、この教会に移って19年にも近くなったのですが、これまでに同じ所にこれほど続けて住んでいたことがなかったことに気がついて驚いています。神様は何を計画しておられるのか、不思議でなりません。しかも、居住地が変わるたびに恵まれた環境に住めることになり、居心地さえよくなるようです。嫌なことがなかったのもなかったのですが、それはそんなにツライことでもなく、気楽な日のつながりだったのです。軍隊でも戦地での数年間さえ、ノンキに過ごせたような気がしますし、中隊長は坊さんで、十日に一度くらいはその師匠の弁士上人の教話を話して、戦争が終わったらもう少し修業せんかとも誘われたほどでした。

学校は、どこでも成績は低空飛行だったのですから、友人たちの助けがあったので卒業できたのかもしれない。むつかしい役をさせられることもなく、適度な気楽さで間に合っていたようです。友人たちは働き過ぎたのでしょうか、生命を縮められ、愚かな私は病気をしても、まだ間に合っているみたい。申し訳けないから、頑張らねばと思うだけ。

近々、あのパウラ・モンタルさんが聖人の尊称をうけられるらしい。このおかたの評伝を見せられて、イエズスさまの「愛の模範の実相」に思い至らされた。これは何としたことか。ありがたいことだ。ありがたいことだ。

(2001.11.22)



出来あがったテスリ



「葉っぱのフレディ」

七浦 鑑吉

私は夜、床について眠る前によくこの「葉っぱのフレディ」の絵本を読みながら眠りにつきます。

この絵本は字が大きく、頁数も少なく、また写真も美しい。編集者のメッセージに「この絵本を、自分の力で『考える』ことをはじめた子どもたちと、子どもの心をもった大人たちに贈ります。私たちはどこから来てどこへ行くのだろう。生きるとはどういうことだろう。死とは何だろう。人は生きていく限りこうした問いを問い続けます。この絵本が自分の人生を『考える』きっかけになってくれることを祈ります」と。

自分の人生も黄昏ちかくなり、自分が歩んだ道をこの本を読みながら振り返りかえてみると、フレディが歩んだ一生からいろいろのことを教えられ、また考えさせられることが多いのです。

春に生まれた葉っぱのフレディは、成長と共にいろいろなことを体験します。フレディは数えきれないほどの葉っぱにとりかまされて、友達と一緒にそよ風にさそわれて踊りの練習をしたり、あたたかい陽射しのときは日光浴を覚えたり、また夕立のときは雨で体を洗ってもらうことをおぼえたり、毎日が楽しくてたまりません。

フレディはダニエルというよき親友に恵まれ、彼は考えることが好きで物知りなので、ダニエルはフレディにいろいろ教えます。

木の知識や、遊びにくる小鳥たちのことや、月や太陽や、そしてめぐりめぐる季節のことなど、みんなダニエルが教えてくれたのです。「さあ体を寄せてみんなでかげをつくらう」とダニエルが呼びかけたとき、「どうしてそんなことをするの?」とフレディはたずねました。するとダニエルは「暑さから逃げ出してきた人間に涼しい木陰を作らせてあげると、みんな喜ぶんだよ」と言いました。木陰におじいさんやおばあさんが集まってきました。子どもたちも来ました。お弁当を広げる人もいます。フレディたちは葉っぱをそよがせて涼しい風を送ってあげました。「フレディ、これも葉っぱの仕事なんだよ。」ダニエルの話を聞いてフレディはますますうれしくなりました。

けれど楽しい夏は駆け足で通り過ぎていきました。たちまち秋になり、ある晩とつぜん寒さがおそってきました。「もうすぐ冬になる知らせだよ」とダニエルが言いました。緑色の葉っぱたちは一気に紅葉しました。

風が変わったのはそのあとでした。夏の間笑いながら一緒に踊ってくれた風が、別人のように顔をこわばらせて葉っぱたちにおそいかかってきたのです。葉っぱたちはこらえきれずに吹き飛ばされ、つぎつぎと落ちていきました。

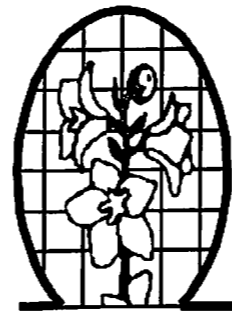
「さむいよう」「こわいよう」。葉っぱたちがおびえていると、風のうなり声の中からダニエルの声が聞こえてきました。「みんな引越しをする時が来たんだよ。とうとう冬が来たんだ。ぼくたちはひとり残らずここからいなくなるんだ。」「ぼくたちここからいなくなるの?」「そうなんだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて葉っぱの仕事をぜんぶやった。太陽や月から光をもらい、雨や風にはげまされて、木のためにも人のためにもりっぱに役割を果たしたのさ。だから引越すのだよ」とダニエルが答えました。

「引越しをするとか、ここからいなくなるとか言っているけど、それは死ぬということでしょう?」胸がいっぱいになったフレディの問いに、ダニエルはわかりやすく教えてくれました。「まだ経験したことがないことはこわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。変化しないものはひとつもないんだよ。春が来て夏になり、そして秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。きみは春が夏になるときこわかったかい?」緑から紅葉するときこわくなかったらう? ぼくたちも変化しつづけているんだ。死ぬというものも変わるものひとつなんだよ。」「この木も死ぬの?」「いつかは死ぬさ。でも「いのち」は永遠に生きていくんだよ」とダニエルは答えました。

では「いのち」とは何だろう。ダニエルの話は続く…。

フレディは枝を離れ、雪の上で眠りにつきました。つぎの春、枯れ葉のフレディは土にとけこみ、木を育てる力になる。ダニエルの言った通り「いのち」は永遠に生きていくのだ。

いのちとは、魂とは、いろいろな思い浮かべながら、いつしか静かに眠りにさそわれていく時間が私は好きである。



標記研修会が、去る10月7日鎌倉の雪の下教会で開催され、当教会から4名が参加した。今回のテーマは「ことばの典礼―神ご自身の語られる言葉を聞き、応える―」で、神の言葉を告げる朗読奉仕者、神の言葉に応える詩篇歌唱者の心構え、更に、信徒の祈りである共同祈願の在り方について学び、「ことばの典礼」を一層充実させる、という目的で行なわれた。

200名近くの参加者は、全体会でのカンペンハウド神父様の講話のあと、三つの分科会(「聖書朗読」「詩篇歌唱」「共同祈願」)に分れて、それぞれのミサにおけるあり方について深める研修が行なわれた。それぞれの分科会での内容について、3回に分けて報告していただきます。

第1回:「共同祈願」分科会より

阿部 映子

私がかねて、中和田教会では共同祈願の例文をそのまま使っておりますが、各教会独自の祈りが必要なのではないかと考えておりました。いつも共同祈願になるとミサが途切れて、字を目で追うだけの祈りになっているような感がありました。

そんな矢先、カンペンハウド神父様から「今日、皆様の祈った共同祈願を覚えていらっしゃいますか?」と質問されました。恥ずかしいことに、何も思い出せませんでした。

神父様は、「聖書と典礼」にある共同祈願は、あくまでも例文であり、このまま唱えるのであれば<ことばの祭儀>にはなっていません。その日の福音、説教との対話を通して生まれる私たち自身の神へのこたえとして祈願しなければなりません。4人くらいの方が、祭壇に向かって、それぞれ信者の祈りとして唱えるもので、<ことばの祭儀>の締めくくりであります。もし例文を使いたいなら、子どもたちにも分るような言葉に直して祈る必要があります。また、この祈りは、教会の中だけの祈りではなく、社会の活動につながってなければなりません」と話されました。

- 一般に、共同祈願は、
- a. 教会の必要のため。
- b. 国政に携わる人々と全世界の救いのため。
- c. 困難に悩む人々のため。
- d. 現地の共同体のため。

の四つの意向で作られます。また、意向は、嘆願、感謝、賛美の祈りを考えるとよいでしょう。意向の作り方としては、

1. 簡潔で短いこと。
 2. 前の人が祈ったのと同じ意向を繰り返さないこと。
 3. 意向は一つだけにする。
 4. 終わりをわかりやすく、「…ように」「…願います」とする。
- 自分自身のために祈るのではなく、すべての人の救いのために祈ります。

以上が今回の研修で、私が学んだことです。

他の教会では、活発に毎週の祈りを作ったり、壮年会、婦人会、子ども会で各々作った祈りを捧げたり、いろいろな工夫がなされ、成果をあげているようです。

中和田でも、自分たちがミサに参加し、神に向かってひとつになって祈るためにも、壮年会、婦人会、子ども達から一つだけでも独自の祈りを加えていって、少しずつ前進させてみてはどうでしょうか?

私たちがその日の福音を受けとめ、深め、分かち合っていくために必要なのではないのでしょうか。研修に参加し、大いに考えさせられた一日でした。

老いの繰り言

丸田 綾子

老いたりな朝の目覚めに
昨夜(よべ)の夢
誰現われしかを思い出せぬは

歳をとるといふことは悲しいことだが、大分前から人の名を忘れることが多くなり、近頃は殊にひどく、来なかりは愚か、物の名前まで出て来ない、新しい物を置いたら覚えられず、苦勞したり、物の置き忘れが中々あります。その大騒動、つくづく情けなく、そんな時ふと両親の事が思い出され、一やういふ二人とも最後まで全然果けなかつたわね」と独り言が出た途端、愕然としました。両親は共に80歳を越えて、いづれ年が明ければ間もなく4歳を越えてしまふことになり、悄然とせざるを得ません。

身体の方は歳並みにますます健康で、跳んだり走ったりは無理としても、自分の足で所用の場所へひとりで行けることを感謝しなければなりません。

細胞は刻々と減少し、身体も老化して、不自由となり、何時の日にかはすべてを自由と手に委ねねばならぬことをひたと思ふと、心細く落ち込まざるを得ないです。

でもそんな時、昔あるシスターから頂いたホイヴェルス神父様の一篇の詩を思い浮かべると、何かほつと暖かいものを包まれ救われる思いがして、安らぎを得られるような気がするのです。

本当に素晴らしい詩です。もうご存知の方もいらっしゃると思いますが、紹介いたします。(これ亦老婆心?)

介が知の方もいらっしゃると思いますが、紹介いたします。(これ亦老婆心?)

最上のわざ

この世で最上のわざは何?

楽しい心で歳をとり、

働きたいけれど休み

しゃべりたいけれど黙り、

失望しそうなときに希望し

従順におのれの十字架をになう。

若者が元氣いっぱい

神の道を歩むのを見て、

人のために働くよりも、

謙虚に人の世話になり

弱くてもはや人のために

役立たずとも

親切で柔和であること。

老いの重荷は神のたまもの

古びた心で最後の

みがきをかける

まことのふるさとに行くために、

おのれをこの世に繋ぐきりを

少しづつはあずして行くのは

真にえらい仕事

こうして何も出来なくなれば

謙遜に承諾するのだ。

神は最後に一番よい仕事を

残してくださる

それは祈りだ。

手は何も出来ないけれども
最後まで合掌できる
愛するすべての人の上に
神の恵みを求めるために、
すべてをなし終えた臨終の床に
神の声を聞くだろう
来よわが友よ
われなんじを見捨てじと。

ヘルマン・ホイヴェルス
「人生の秋」より